

学位論文題名

いじめに関する社会心理学的研究

学位論文内容の要旨

本論文は、いわゆる「いじめ」に関して一般に流布し受け入れられている信念および言説である、いじめの「しろうと理論」の内容と、その発生機序に関する一連の調査および実験研究の成果を取りまとめたものである。

第1章は、いじめに関するこれまでの研究と、それらの研究で用いられてきた「いじめ」の定義を概括し、これまでの研究では多くの場合、攻撃行動一般と「いじめ」との間の概念的区別が曖昧にされてきた点、更に、この概念的区別の曖昧さのゆえに、欲求不満・攻撃仮説のような、攻撃行動の心理学的説明をそのままいじめに適用するという、一種の心理学主義が生み出されてしまったことを指摘している。続く第2章は、まず、第1章で紹介されたいじめ研究の多くが、いじめについての無自覚的な「しろうと理論」に影響されることで、いじめの当事者たちや、教師などの現場に携わる人たちの間に混乱を引き起こしている可能性を指摘し、それゆえ、混乱の背後にある「しろうと理論」の内容を明らかにし、そしてその発生の機序を理解する研究の重要性を主張している。その後、「しろうと理論」の概念的定義を行い、続いて、いじめのしろうと理論の中でも、特に重要なものとして、「いじめられる側にも何らかの問題がある」とする信念を取り上げることが宣言されている。第2章では、更に、ある教育団体によってインターネット上に開設されている、いじめ関連の掲示板への書き込み内容を紹介し、そこでは、「いじめられる側に問題がある」とする根深い信念が頻繁に語られていることを明らかにしている。

第3章は、1984年から95年までの期間に朝日新聞に掲載された、見出しに「いじめ」を含む1,144件の記事のうち、学校におけるいじめに関連した851件の記事を抽出し、その記事の内容分析を行っている。その結果、(1)いじめの被害者と加害者の個人的属性に関する記述に関しては、これらの記事の中では、加害者の属性に関する記述よりも被害者の属性に関する記述が圧倒的に多いこと、そして(2)いじめ被害者の属性に関しては、ネガティブな属性の記述数がポジティブな属性の記述数のほぼ3倍に達することが明らかにされた。すなわち、これらのいじめに関連した記事が当事者の個人的な属性に言及する際には、加害者よりも被害者の属性に言及することが圧倒的に多いこと、そしてその際、いじめの被害者がポジティブな属性の持ち主としてではなく、「自立心が育っていない」、「鈍い」、「遅い」などといったネガティブな属性の持ち主として言及されることが圧倒的に多いことが明らかにされている。

第4章は、いじめの当事者としての経験をもつ10名の調査協力者に対して、長時間に渡る聞き取り調査を行い、そのテープを起こしたトランスクリプトの内容分析を行っている。その分析結果は、第3章で示された新聞記事の内容分析結果と一貫すると同時に、更に興味深い事実を明らかにしている。すなわち、一般論としていじめを語る場合と、自分が経験した具体的ないじめの事例について語る場合とで、被害者と加害者の属性についての言及数が異なってくるという結果である。まず一般論としてのいじめについて語る場合には、いじめの被害者の個人的属性についての言及数と、加害者の属性についての言及数がほぼ同数となっている。更に、いじめ被害者の個人的

属性としては、「おとなしい」といったニュートラルな属性が用いられる場合がほとんどである。これに対して、自分が経験した具体的ないじめの事例について語る場合には、被害者の個人的属性に対する言及数が、加害者の個人的属性に対する言及数を圧倒的に上回り、しかも被害者の個人的属性として、「むかつく」、「愚鈍」などといったネガティブな属性が多く挙げられるようになっていく。

第5章では、具体的ないじめ現象そのものの中に、「いじめられる側にも問題がある」とする信念を生み出す、あるいは引き出す原因が潜んでいるのではないかという、第4章での示唆を受けて、その原因が、「複数の人間によって」「特定の人間に対して」「繰り返し」加えられるという、攻撃行動一般と区別されるべきいじめの性質(第1章での議論を受けている)そのものにあることを示す、場面想定法を用いた実験結果が報告されている。これらのいじめの特徴は、社会心理学における帰属理論で明らかにされている、内的帰属を引き起こしやすいとされる特性を代表している。つまり、いじめは、いじめを攻撃行動一般から区別するいじめ独自の形態のゆえに、被害者に原因があると考えられやすい特徴をもっていることになる。大野氏は、これらの要因を操作したいじめのシナリオを用意し、そのシナリオに登場するいじめの被害者と加害者のどちらにいじめの原因があると人々が考えるかを調べる実験を行い、これら3つの要因の中でも一貫性(すなわち、一人の生徒ではなく多くの生徒がいじめを行っている)の高さが、いじめの被害者に責任があるとする判断を高めていることを明らかにしている。

第6章の目的は、これまでの研究で明らかにされてきた、被害者の「弱さ」がいじめを招き寄せるとする信念が、外見ステレオタイプにまで浸透していることを示すことにある。第6章では、まず、2つの高校のクラスの卒業写真を、それらのクラスとは全く無縁の人々に見せ、その写真の中の誰がいじめの被害者で、誰がいじめの加害者であったかと思うかを判断させた。その結果、この研究に参加した判定者たちは、写真に示された外見のみを使って、誰がいじめの被害者であったかについてかなり高い判断の一致を示すことが明らかにされた。更に、別の判定者のグループに同じ写真を提示し、それぞれの写真人物についての性格特徴の推定を行わせたところ、先のグループによっていじめ被害者として判断された写真人物が、もう一つのグループによって「精神的な弱さ」および「身体的な弱さ」によって特徴付けられることが明らかにされた。またこの研究では、当該クラスの卒業生たちに手紙を出して、誰が実際にいじめの被害にあっていたかを確かめており、その結果と、ほとんどの場合には、外見を基にした判断は現実のいじめの被害者とは一致していないが、判定者によって一番高い頻度でいじめ被害者と判断された写真の人物は、実際にいじめの被害者であったと元のクラスメートたちから一番頻繁に報告されている人物であったことが明らかにされた。この結果は、少数の実際の被害者が持つ特徴が、いじめ被害者一般の特徴として過剰一般化されている可能性のあることを示唆するものである。

最後の第7章では、これらの研究結果が総合的に検討され、いじめのしろうと理論、特に「被害者の側にも何らかの問題がある」とする信念が、なぜこれほどまでに広範かつ強固に人々の間に浸透しているのかについての考察が、主として、被害者に注目が集まることが生み出す原因帰属のバイアスという点から行われている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 岸 俊 男
副 査 教 授 小 林 甫
副 査 助 教 授 高 橋 伸 幸

学 位 論 文 題 名

いじめに関する社会心理学的研究

本論文は、いわゆる「いじめ」に関して一般に流布し受け入れられている信念および言説である、いじめの「しろうと理論」の内容と、その発生機序に関する一連の調査および実験研究の成果を取りまとめたものである。第1章で、いじめに関するこれまでの研究と、それらの研究で用いられてきた「いじめ」の定義が概括され、これまでの研究の問題点が、攻撃行動一般と「いじめ」との間の概念的区別が曖昧にされてきた点にあることが指摘されている。続く第2章は、まず、第1章で紹介されたいじめ研究の多くが、いじめについての無自覚的な「しろうと理論」に影響されることで、いじめの当事者たちや、教師などの現場に携わる人たちの間に混乱を引き起こしている可能性を指摘し、それゆえ、混乱の背後にある「しろうと理論」の内容を明らかにし、そしてその発生の機序を理解する研究の重要性を主張している。その後、インターネット上のいじめ関連の掲示板への書き込み内容を紹介し、そこでは、「いじめられる側にも何らかの問題がある」とする根深い信念が頻繁に語られていることを明らかにしている。最後の第7章では、第3章から第6章にかけて報告されている個別研究の結果が総合的に検討され、いじめのしろうと理論、特に「被害者の側にも何らかの問題がある」とする信念が、なぜこれほどまでに広範かつ強固に人々の間に浸透しているのかについての考察が、主として、被害者に注目が集まることが生み出す原因帰属のバイアスという点から行われている。

本論文の成果は、まず、「しろうと理論」、特に「いじめられる側にも何らかの問題がある」とする信念が、いじめ問題の解決を困難なものにしている点に着目したという、問題設定の独自性にあると同時に、第4章から第6章にかけて報告されている個々の調査ないし実験研究で明らかにされた知見の意義と重要性に表れている。以下にまず、これらの知見のうち重要なものを列挙する。(1)第3章で報告されている、新聞記事の内容分析から、新聞にいじめ関連の記事が取り上げられる際には、加害者の個人的属性に言及されることはまれであるが、被害者の個人的属性に対する言及が頻繁になされること、そしてその内容の大多数がネガティブなものであることが明らかにされた。(2)第4章で報告されている、いじめの(加害者として、ないし被害者としての)経験者への聴き取り調査の詳細な内容分析から、いじめを一般論として語る場合にくらべ、自分が直接に経験したいじめの具体例について語る場合には、被害者の個人的属性についての言及が大

幅に増加し、またその内容が「むかつく」「愚鈍」などといったネガティブな属性に偏るようになることが明らかにされた。(3)第5章で報告されている、場面想定用を用いた実験によって、「複数の」生徒が「特定の」生徒に対して「繰り返し」行う攻撃であるいじめの特性のうち、最初の特性である一貫性の高さが、いじめ被害者への原因帰属を促進することが明らかにされた。(4)第6章で報告されている、写真人物についての判断課題を用いた研究によって、外見から精神的および身体的な弱さが推測される人物が、同時に(別のグループの判定者によって)いじめの被害者として推定されることが明らかにされた。これらの結果は、全体として、「いじめの被害者の側にも何らかの問題がある」とする信念が、広範な人々の間で受け入れられているだけではなく、特定の外見的特徴をもつ生徒をいじめの被害者として多くの人間が一致して判定するなどといったかたちで、強固ないじめ被害者ステレオタイプを生み出していることを明らかにすると同時に、そのようなステレオタイプないじめのしろうと理論が生み出され維持されるにあたっては、複数の生徒が特定の生徒に対して攻撃を行うといういじめの構造的特徴が、被害者の顕現性、および観察者による被害者への注目度を高め、被害者への原因帰属を行う認知的プロセスを促進した可能性を強く示唆するものである。この点は、被害者非難に関する従来の社会心理学的説明の中心をなしてきた「正当世界仮説」よりも、情報の顕現性の効果のほうが、いじめのしろうと理論の背後でより強く働いていることを示すものであり、被害者非難現象一般についての再検討を迫るものでもある。

これらの知見および知見に基づいて展開された議論は、社会心理学の学問分野を越えて、いじめという重大な現象の解決を目指す多くの人々に対して、その理解を進める上で大きな貢献をなすものであるとの判断が委員全員一致で下され、本論文を博士(行動科学)の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。